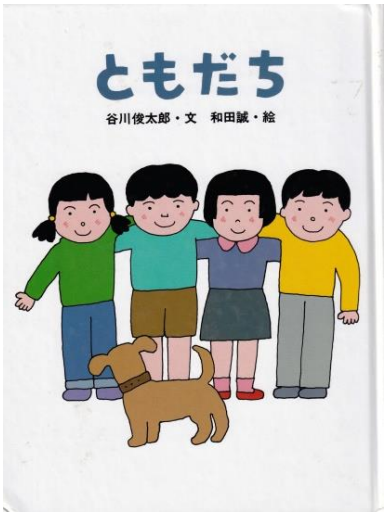
豊庄だより

第 646 号 2021 年1月 4 日

福岡市早良区南庄２－２６－１３
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長　西尾　達

今年は干支の 2 番目の丑（うし）年。牛は神様の家に一番早くたどり着いたのに、背中に乗っていたねずみが飛び降り、そのまま神様の家にゴールイン。ねずみが1番、牛は2番目になってしまいました。でも2番目になったからと言って、腹をたてることのない牛のおおらかさは見習いたいものです。



さて、昨年から続くコロナ禍は年を越しても一向に収まりそうにありません。コロナ禍は、人と人とのつながりを断つものです。新型コロナウィルスの濃厚接触者と保健所から認定されると、PCR 検査を受けることになり、そこで陽性と診断されれば、隔離されます。入院しても、家族とはオンラインでしか会えません。新型コロナウィルスは、ともだちとともだち、親しい人と親しい人の間を、「ソーシャルディスタンス」なるもので、引き離していった感じがします。

「ともだちって　かぜがうつっても　へいきだって　いってくれるひと」谷川俊太郎さんの『ともだち』（玉川大学出版部）の冒頭の部分です。この本が出版されたのは 2002 年でした。これまで当たり前に感じ、大事にしてきたものが通用しません。

昨年中止・縮小した行事は、卒園式、入園式、親子バスハイク、誕生会、七夕夏まつり、運動会・・・。どの行事も、「これまでこのようにしていたから」という「前例主義」が通じず、昨年までの保育を見直し、どのような行事にしていくか、何度も何度も話し合いをしなければなりませんでした。といっても、保育園は、学校と異なり、授業が終わったあと、全員が集まり会議をするなんてことはできません。代表の数人で短時間の会議をし、そこで話し合われたことは、参加したものが各クラス（給食も含め）に伝え、次の会議のときには、簡単でもいいから話し合った中身をまとめたものを作り、それをもとにさらに計画を煮詰めていくという作戦を取りました。この話し合いでは実に色々なアイディアが出されました。一つひとつ吟味しながら、行事のプランを作っていきました。（※もちろん、最終的な決定は職員会議でしました。）

私が大切にしていることがあります。それは、「ひとりで悩まない」ということです。毎月、誕生会の時に行っている懇談会で、「家では、好き嫌いばかりして、食べないんですよ。保育園では食べていますね」「夜、なかなか寝ない」「おむつが取れない」「何を言ってもイヤイヤで困っています」などの声を聞きます。そして、参加した人の「あ～、みんなそうして育児をしていたんだあ」「うん、うん」と相槌を打つ姿が見られます。さらに、実は私のところもそうなんですと、話される人も出てきます。また、参加者の中には、保育園に何年も通っている先輩のお父さんお母さんから、自分たちの体験を語ってくれます。悩みを話したところで直ぐに解決には結びつくほど、育児は簡単なものではありません。しかし、保育園という場が悩みを共有できるところなんだと思ってくれることが一番大きなことではと思っています。

『ともだち』は、お話の中ほどに、「ひとりでは　もてない　おもいものも　ふたりでなら　もてる。」と書かれたページがあります。コロナ禍は、人と人を分断しています。しかし、こうした中でも保育を通して人と人を結びつけていくことの大切さを感じています。

こんな気持を持って、今年もがんばります。よろしくお願いいたします。

今年の羽子板
作：前絵画教室井上先生